



大切な内容だからこそ今の時期に

2011年に大津市で起きたいじめ問題を契機として、いじめ対策推進法が制定されました。

しかし、尚いじめのニュースは後を絶ちません。

ニュースや新聞を読むたび、胸がおしつぶされそうになります。

決して対岸の火事ではありません。

どんなに素晴らしいクラスでも、いじめは起こり得ることだからです。

「いじめ」は、それにかかわる全ての人を不幸にします。

被害者も、加害者もです。

いじめの醜さと悲惨さを伝え、いじめを「しない」「させない」子どもたちになってもらいたいと思っています。

そのためには、単に「いじめは良くない」「悪いことだ」と、言って聞かせるだけでは足りません。

話し合いや作文を書かせることも一定の効果はあるかもしれませんが、全ての子に響くかといえはやはり疑問符が付きます。

どの子の心にも響くようにするためには、力のある資料を用い、具体的に考えさせることが必要です。

そして、こうした学びは、思春期など一定の年齢を迎える前に通過しておくことが大切なのだと思最近切に思うようになりました。

先週、最初の道徳がありました。

一番初めだからこそ、最も大切なことについて外すわけにはいかないと考え、次の授業を行いました。

「わたしのいもうと」（松谷みよ子作）という絵本があります。

いじめの実話を題材とした作品です。

間違いなく力のある資料の1つだと言えます。

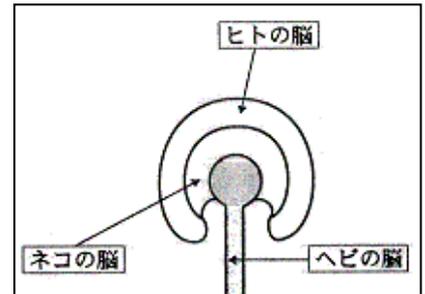
読み聞かせるだけで、子どもたちはシーンとします。

いじめの悲惨さ理不尽さが、読者の心をわしづかむからです。私達の情に訴えます。

これまでに、この本を使って幾度か授業をしてきました。

今回は、より子どもたちに具体的に考えてもらうべく、以下のように授業を行いました。

授業が始まってすぐ、私は右の絵をホワイトボードに書きました。



人間の脳は3つの部分で出来ています。

1つ目の脳は、息を吸ったり、ものを食べたり、眠ったりなどの命令を体に出す脳です。この脳が働かないと、人間は生きていくことが出来ません。ヘビなどの生き物はこの脳しかないので、これを「ヘビの脳」といいます。

2つ目の脳は、喜んだり、怒ったり、悲しんだりするための脳です。これを「ネコの脳」と言います。ネコや犬は、この部分まで脳があります。

3つ目の脳は、人間だけにあります。ものを考えたり、覚えたり、言葉を話したり、勉強したりする脳です。人間にしかないので、これを「ヒトの脳」と言います。

絵を指しながら、一通り説明をした上で問いました。（ちなみに、ヘビの脳は「脳幹」、猫の脳は「旧皮質」、ヒトの脳は「新皮質」です。）

いじめを受けると、脳のある部分が攻撃されます。

3つの内、どの脳が、攻撃されると思いますか。

ほとんどの子が、「ヒトの脳」「ネコの脳」と答えました。

これは、どの学年でも同じ傾向となります。

「心から喜ばなくなる」「勉強ができなくなる」と思うからなのでしょう。あえて答えは告げず、ここで読み聞かせを行いました。

「わたしのいもうと」、実物の絵本です。

トーンと落とした口調で、静かに読んで聞かせました。

わたしのいもうと

松谷みよ子

この子は、わたしのいもうと。むこうをむいたまま、ふりむいてくれないのです。いもうとのはなし、きいてください。

いまから七年まえ、わたしたちは、この町にひっこしてきました。トラックにのせてもらって、ふざけたり、はしゃいだり、アイスクャンディをなめたりしながら、いもうとは小学校四年生でした。

けれど、てんこうした学校で、あのおそろしいいじめがはじまりました。ことばがおかしいとわらわれ、とびばこができないといじめられ、クラスのはじさらしとののしられ。くさい、ふたといわれ。

——ちっともきたない子じゃないのに

いもうとがきゅうしょくをくばると、うけとってくれないというのです……。

とうとうだれひとり、くちをきいてくれなくなりました。ひと月たち、ふた月たち、えんそくにいったときも、いもうとはひとりぼっちでした。

やがていもうとは、学校へいかなくなりました。

ごはんもたべず、口もきかず、いもうとはだまってどこかをみつめ、おいしゅさんの手もふりはらうのです。でも、そのとき、いもうとのからだにつねられたあざがたくさんあるのがわかったのです。

いもうとはやせおとろえ、このままではいのちがもたないといわれました。かあさんがひっして、かたくむすんだくちびるにスープをながしこみ、だきしめていっしょにねむり、子もりうたをうたって。

ようやくいもうとはいのちをとりとめました。そして、まい日がゆっくりとながれ。

いじめた子たちは中学生になって、セーラーふくでかよいます。ふざけっこしながら、かばんをふりまわしながら。

でも、いもうとはずうっとへやにとじこもって、本もよみません。おんがくもききません。だまって、どこかを見ているのです。ふりむいてもくれないのです。

ここで話を少し止めて、子どもたちの様子を改めて見渡しました。

誰も身じろぎせず、絵本の中身一点を集中して聴いている様子が伝わってきました。

一呼吸おいてから、話の続きを静かに読み進めました。

そしてまた、としつきがたち、いもうとをいじめた子たちは高校生。まどのそとをとおっていきます。わらいながら、おしゃべりしながら・・・。

このごろいもうとは、おりがみをおるようになりました。あかいつる、あおいつる、しろいつる、つるにうずまって。でも、やっぱりふりむいてはくれないのです。口をきいてくれないのです。

かあさんはなきながら、となりのへやで、つるをおります。つるをおっていると、あの子のことがわかるようなきがするの・・・。
ああ、わたしの家はつるの家。わたしはのはらをおるきます。くさはらにすわると、いつのまにかわたしもつるをおっているのです。

ある日、いもうとはひっそりとしにました。

つるをてのひらにすくって、花といっしょにいれました。

いもうとのはなしはこれだけです。

少し間をおいてから、問いました。

「妹はどうなりましたか。」

「死んじゃいました。」

「いじめた子はどうなりましたか。」

「そのまま楽しく学校に行っています。」

妹は、死んでしまいました。

いじめた子たちは、元気に学校に通っています。

みんなは、いじめた子たちをどうすればいいと思いますか。

「妹の家族に謝りに行かせる。」

多くが、この意見でした。

「みんながもし同じ目にあったら、みんなの家族は謝ってもらっただけで気がすみますか？」

「もう一度聞きます。妹をいじめた子たちにどう責任をとらせますか。」

ここで、子どもたちの意見が一気に詳しくなりました。

- 警察に逮捕してもらおう。
- 何回も謝り続ける。
- 裁判にかけ、牢屋に入ってもらおう。
- 何か相手を喜ばせることをする
- 学校をやめてもらおう。

一通り発表が出尽くしたところで、言いました。

どれだけのことをしたとしても、きっと気持ちは晴れません。

責任を取るなどできないのです。

なぜなら、妹はもう帰ってこないからです。

みんな、大きく頷きました。

ここで、最初の問いに戻りました。

いじめを受けると、実は脳のある部分が攻撃されます。

どの脳が、攻撃されると思いますか。

意見は、がらりと変わりました。

話の中に出てきた「いもうと」の様子。

それを読んで、思い当たるところがあったようです。

ほとんどの子が「ヘビの脳」と答えました。

次のように話しました。

いじめは、ヘビの脳を攻撃します。

息を吸ったり、ものを食べたり、眠ったりする力を奪っていることになるのです。

話の中の妹も、生きる力がみるみるなくなっていました。

いじめは、相手の命をどんどん縮めているのです。殺人をしているのと同じなのです。

実際にいじめを受けた人の脳には、顕微鏡で見える「穴」が開いています。

これは、東北大学の松沢大樹氏の研究で明らかになりました。

深刻ないじめを原因に、心の不調を訴えて来院した全ての子どもたちには

すべて、脳の傷が認められたそうです。

いじめは、見えない刃で人の生きる力を傷つけているといえます。

最後に一つ、質問しました。

ほとんどのいじめは、何から始まるか知っていますか。

何人かの子たちが発表した後、きっぱりと言いました。

陰口・悪口です。

こうした授業は、いわば「くさび」です。

重大なことが起きてから取り返しがつかないからこそ、こうした内容はできるだけ予防的に先んじて行う必要があるといえるでしょう。

ちなみにもう少し上の学年なら、関係する法令や実際の新聞記事などを紹介して、“もう一步の詰め”をします。

が、今回は4年生ということもあり、さらに学期初めということもあり、そこは割愛しました。

改めて書きますが、いじめはどんなクラスでも起こり得ることで

ですが、クラスと仲間の作り方次第で、そうした問題を跳ね返す力を身に付けていくことだって可能です。

4年1組でも、そんな力を身に付けたいと思い、あえて今回の授業を組み立てました。

ご家庭でも、機会を見つけて話題に載せてもらえれば幸いです。



☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ 投稿、お待ちしております！

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcipcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

